書見台

南アフリカの図書館と文書館

北　川　勝　彦

今年（2010年）は、日本と南アフリカの公式の交流が始まってから100周年にあたる。昨年12月から1年間さまざまな記念行事がプレトリアやケープタウンで行われるようである。ケープタウンに名誉領事館が開設されたのは、1910年であった。明治政府は、南アフリカの通商情報を得るためにジュリウス・ジェップ（Jullius Jeppe）を名誉領事として任命した。同氏は、1918年にケープタウン領事館が開設されるまで詳細な領事報告を外務省通商局に送っている。今日では、日本は南アフリカにとって最大の輸出相手国であり、第4位の輸入国である。また、アパルトヘイト廃絶後、1994年には新生南アフリカにマンデラ政権が成立する。1998年以来、「日本―南アフリカパートナーシップ・フォーラム」の下、両国間では貿易と投資、経済協力、科学技術協力および文化交流などが盛んに行われている。

以上のような背景の下で、最近、日本で南アフリカに関するすぐれた研究書や啓蒙書が刊行されるようになった。歴史書では、ロバート・ロス著、石鎚優訳『南アフリカの歴史』創土社（2009年）やレナード・トンプソン著、宮本正興他訳『南アフリカの歴史（最新版）』明石書店（2009年）が刊行されている。現代の南アフリカを論じたものとしては、平野克己『南アフリカの衝撃』日経プレミアムシリーズ（2009年）、西浦昭雄『南アフリカ経済論―企業研究からの視座―』日本評論社（2008年）、および佐藤千鶴子『南アフリカの土地改革』日本経済評論社（2009年）などがある。

さて、筆者は、南アフリカの歴史を経済史の立場から研究してきたのであるが、その際、南アフリカにおける研究の動向を知るために以下の学術雑誌に導かれてきた。第1は、1968年以来南アフリカ歴史学会の機関誌として刊行されてきた『南アフリカ歴史ジャーナル』（*South African Historical Journal*）である。本誌の編集陣には、筆者が南アフリカ経済史研究を進める上でかずかずの助言を下さった歴史家として、ビル・フロインド（Bill Freund）、ポール・メイラム（Paul Maylam）、イアン・フィミスター（Ian Phimister）、アンドリュー・トンプソン（Andrew Thompson）の名前が見られる。第2は、1985年以来南アフリカ経済史学会の機関誌として刊行されてきた『南アフリカ経済史ジャーナル』（*South African Journal of Economic History*）である。2012年7月には国際経済史会議がステレンボッシュで開催されることが決定された。本誌にかかわっている南アフリカの経済史家を中心にして国際会議が準備されるものと思われる。そして第3は、1974年以来刊行されてきた『南部アフリカ研究ジャーナル』（*Journal of Southern African Studies*）である。本誌の編集には、世界中の著名な南部アフリカ研究者がかかわっており、南アフリカに限らず、南部アフリカ地域に関する諸問題が扱われている。この雑誌は、関西大学図書館に収蔵されており、関心のある人々に広く利用されることを期待している。

それらの学会誌と並んで南アフリカ史研究に必要な史料を検索する文献目録として、1986年には『南アフリカマニュスクリプト集成目録　1985年版』（*Directory of Manuscript Collections in Southern Africa 1985*）が刊行された。現在では、南アフリカ国立文書館（National Archives of South Africa）が全国文書館記録サービス（National Archives and Record Service, NARS）のウエッブサイトを立ち上げ、目録（Directory）をオンラインで見ることができるし、全国文書館情報自動検索システム（National Automated Archival Information Retrieval System, NAAIRS）もウエッブにあげられ、NARSのアドレスからアクセスできるようになった。2005年現在で掲載されている文書館の数は119である。

本「書見台」で紹介するのは、南アフリカ経済史研究あるいは日本―南アフリカ通商関係史研究で筆者がこれまで利用してきた図書館や文書館のうちで以下の4館である。すなわち、ジョハネスバーグ

のブレントハースト図書館（Brenthurst Library）とスタンダード・バンク文書館（Standard Bank Archives, Standard Bank Heritage Centre）、ケープタウンのケープタウン文書館（Cape Town Archives repository）、ダーバンのキリー・キャンベル・アフリカーナ図書館（Killey Campbell Africana Library）である。

(1) ブレントハースト図書館（Brenthurst Library）

ブレントハースト図書館は民間の施設で、鉱山開発金融の巨大企業グループとして知られるアングロ・アメリカン社およびダイヤモンド関係企業のデビアス社の経営にかかわってきたオッペンハイマー一族のアフリカーナ・コレクションが収蔵されている。1984 年、ハリー・オッペンハイマー（Harry Oppenheimer, 1908 ～ 2000）によって設立された。約 20,000 冊の文献を収蔵している。その中には希少なマニュスクリプトや文書が含まれる。これらの文書の中には、ネルソン・マンデラの反逆罪裁判に関する完全な記録が含まれていたが、この文書は、2008 年 11 月マンデラの所領に移管された。

ドイツ生まれで、ロンドンに移住してダイヤモンド取引にかかわったアーネスト・オッペンハイマー（Earnest Oppenheimer, 1880 ～ 1957）は、1902 年、三年契約でキンバリーのダイヤモンド商社であったアントン・ドゥンケルスブーラー社の代表として南アフリカに派遣された。アーネストは、ダイヤモンド鉱業だけでなく地方の政界にも進出し、南アフリカの諸問題に深く関わった。彼は南アフリカを自らの郷里と定め、南部アフリカに関する書籍、パンフレット、芸術作品、地図、手稿類などを精力的に収集した。著名なコレクターであったメイジャー・ウイリアム・ジャーディン（Major William Jardine）や議会図書館のライブラリアンであったポール・リビンク（Paul Ribbink）は、アフリカーナ・コレクションを充実するために多くの助言をアーネストに与えた。

このコレクションは、1930 年代までキンバリーに保存されていたが、アーネストを継いだハリーは、ジョハネスバーグのブレントハースト所領の邸宅の一つであったリトル・ブレントハーストに図書館を建てて、資料を収蔵した。1970 年代末まで徐々に拡大してきたコレクションに対して閲覧を希望する声が大きくなってきたために、ハリーは所領内に新たな図書館を建設するとともにブレントハースト出版部を設立して、資料集を出版しはじめる。現在では、オッペンハイマー一族の図書館は、ニコラス・オッペンハイマー（Nicholas Oppenheimer）とマリー・スラック（Mary Slack）によって運営されている。

筆者がブレントハースト図書館に関心を持ったのは、19 世紀中葉の南アフリカを旅行し、数多くのスケッチや絵画を残したトーマス・ベインズ（Thomas Baines）の作品の原画が同図書館に収蔵されていることを知ってからである。この図書館には、16 世紀から 19 世紀までの地図、海図、地図製作法、旅行記、探検記などの原本と研究資料が収蔵されている。17 世紀末以降の南部アフリカの体験を記録したさまざまなマニュスクリプトも所蔵されており、その中には政治家、ミッショナリ、官僚、軍人の手紙類、日記やジャーナル、初期の鉱山活動の写真、各種企業や慈善団体の記録、ケープ総督の報告書、スクラップブック、新聞切り抜き、スケッチ、幻燈、書物やパンフレット、絵画などが収められている。

ブレントハースト図書館ロビー

出版物シリーズ

（出所　http://www.brenthurst.org.za/brenthurstlibrary.cfm）

⑵ スタンダード・バンク文書館（Standard Bank Archives, Standard Bank Heritage Centre）

現在、スタンダード・バンク・ヘリテッジ・センターに収められている英領南アフリカ・スタンダード・バンク（British Standard Bank of South Africa）のケープタウン・マネージャーが残した報告書は、19 世紀の南アフリカ経済史を研究する上で貴重な資料であるが、まだ、南アフリカでも日本でもほとんど研究されていない。

南アフリカ経済史は魅力的で豊かな研究フィールドであると思われるが、未開拓なところの多い分野である。南アフリカの過去の経済生活に関する研究には、まだ調査と利用を待っている史料が数多く存在するに違いない。近年、南アフリカ経済史研究が進展し、企業文書のコレクションの保存、収集および詳細な調査が行われるようになった。史料の保護と保存には多くのことがやり残されているが、筆者の印象では、そうした史料の中の最たるものはスタンダード・バンク・グループの史料である。

南アフリカ・スタンダード・バンクの主たる史料としては、二つのコレクションをあげることができる。一つの資料集には、南アフリカで書かれた多くの文書の原本が含まれており、ロンドンのスタンダード・チャータード・バンク（Standard Chartred Bank）に収められている。もう一つのコレクションは、ジョハネスバーグのスタンダード・バンク文書館にある。その中にはイングランドから届いた文書の原本、南アフリカからロンドンに送られた文書の写しが収められている。後者の文書には、調査報告集、署名入り取引文書、写真など他の資料も収められている。筆者が目にしたのは、スタンダード・バンクの本店から書き送られたジェネラルマネージャーの手紙類の写しであるが、それらは、19 世紀半ばから 20 世紀における南アフリカ経済史の展開を知ることのできる貴重な第一次史料である。

⑶ ケープタウン文書館（Cape Town Archive Repository）

ケープ植民地政府は、1876 年、植民地の文書を収集し、吟味し、分類し、索引を作成するための委員会を任命した。1879 年、ジョージ・マコール・シール（George McCall Theal）がこれらの文書整理の監督にあたった。1881 年、彼の後を引き継いだのがライブブラント（Rev HCV Leibbrandt）であった。イギリスのケープ支配が始まる 1806 年以前の日付のあるすべての植民地文書も政府の図書館（Government Public Library）に移された。1886 年以降、植民地関係文書は、議会の地下の耐火室に収蔵された。ライブブラントは、彼の生涯をかけてこれらの文書類の整理に専念し、『喜望峰文書館概要』（Precis of the Archives of the Cape of Good Hope）として刊行した。1908 年、ライブブラントは引退する。南アフリカ連邦の成立する前年の 1909 年、植民地政府の文書を管理するために 2 名の係官が任命され、公務終了後、文書を整理し、目録を作成する仕事にたずさわった。1912 年には、そのうちの 1 名、ボタ（C. G. Botha）は、主任としてケープ文書館に配転となった。1919 年には、文書館業務が再編され、以後、ケープ文書館は南アフリカ政府文書管理行政の中心となった。1934 年～ 1989 年には、ケープ文書館はクイーン・ヴィクトリア通り（Queen Victoria Street）の南アフリカ大学の建物の一部を占めていたが、1989 年末、現在のローランド通り（Roeland Street）に移り、名称もケープタウン文書館（Cape Town Archive Repository）と変更されたのである。関西大学図書館には、喜望峰植民地およびケープ植民地の政府文書および各部門別文書のマイクロフィルムが収められている。本資料集成は、日本では、慶応大学図書館と本学図書館にしか収蔵されていない貴重なものである。

現在では、西ケープ州のすべての公的文書が 20 年を過ぎるとこの文書館に移される。この文書館では、西ケープ州の歴史に関するあらゆる非公式記録も収集し、各コミュニティに関する記録も収集されている。その中には地図、写真、マイクロフィルム、単行本、パンフレット、公的刊行物が含まれる。

なお、ケープタウン文書館の管理下にある文書として南アフリカ経済史研究に関する史料には以下のものがある。オランダ東インド会社の統治時代の文書（1652 ～ 1795 年）、最初のイギリス占領時代の文書（1795 ～ 1802 年）、バタヴィア期の文書（1803 ～ 1806 年）、イギリス植民地支配期政府文書（1806 ～ 1910 年）、1910 年以後の連邦期および共和国期の文書などである。また、非公式記録の中には、Sir B. Durban（1823-1854）, F. S. Malan（1795-1941）, St. George Cathedral（1806-1923）, Sir Richard Southey（1834-1899）, Maclear-Mann Papers（1811-1909）などの興味深い人物に関する文書も収蔵さ

れている。

⑷ キリー・キャンベル・アフリカーナ図書館（Killey Campbell Africana Library、Campbell Collection）

キャンベル・コレクションは、ネオ・ケープ・ダッチ風の邸宅、ムックルヌーク、すなわちかつてナタール植民地の砂糖プランテーションの経営者であり、政治家であったマーシャル・キャンベル（Marshall Campbell, 1948 ～ 1917）の邸宅に収蔵されている。本コレクションは、息子のウイリアム（William Campbell, 1880 ～ 1962）と娘のキリー（Killey Campbell, 1881 ～ 1965）によって設立された。アフリカーナの収集家として著名なキリーは、1965 年に没するまでムックルヌークに暮らし、本コレクションの充実と管理にあたった。

したがって、この図書館は、キリー・キャンベルの名前にちなんで命名されたのである。キリーは、情熱的な収書家であった。彼女は、若いときから貴重な、特色のある資料―手稿、書物、写真、地図、政府刊行物―を収集してきた。それらは南部アフリカについての幅広い分野の情報を網羅するものであった。とりわけ、クワズールー・ナタール地域に関する資料の収集に重点がおかれていた。このコレクションは、クワズールー・ナタール大学に遺贈され現在に至る。

手稿（マニュスクリプト）のコレクションは、クワズールー・ナタール地域のングニ語を話す人々とイギリス人入植者の間の接触の初期の歴史についての重要な資料として知られている。二つの社会の持続的な相互交流の歴史―アフリカ人小農民、首長、商人、ミッショナリ、入植者農民および軍隊の活動を含む―は、同図書館のさまざまなコレクションから知ることができる。

この地域に関連する核になる所蔵資料の例としては、以下のものがある。The James Stuart Collection（ズールー語を話すインフォーマントを対象に 20 世紀初頭に行われたインタービューの記録）、Colenso Papers（コレンソ主教 J. W. Colenso と彼の家族の手紙や著作）、Evelyn Wood Papers（イギリスの植民地帝国における著名な軍人の手紙類）、Inanda Seminary（多くのアフリカ人女性が教育をうけた重要な教育機関の記録）、E. G. Malherbe Collection（ナタール大学の学長として著名な教育学者の生涯、思想、活動についての資料）、Black Sash Records（人種差別に異議をとなえたブラック・サッシュの活動記録）などである。以上の資料以外に、本図書館は、パンフレット、地図、ジャーナル、写真、連邦成立以前のナタール植民地政府出版物、19 世紀に発行された新聞記事のコレクションがある。

以上、本書見台では、南アフリカ史に関する膨大な文書史料が収められている数多くの図書館と文書館の中で、筆者がこれまで調査しえたわずかな成果を紹介したに過ぎない。今後も機会が得られれば、調査を継続したいと考えているが、近い将来、南アフリカの歴史に関心をよせてくれる研究者が数多く現れてくれることを期待してやまない。

キャンベル・コレクションの入口
（出所　http://campbell.ukzn.za/）

（きたがわ　かつひこ　経済学部教授）